

堀田雄大の図画工作科（第3学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

第3学年及び第4学年の図画工作科では、子どもが「材料などから豊かな発想をすること」「表し方を工夫すること」によって、想像力や構想力などの造形的な能力を育成することが求められている。特に、表現A(1)「材料を基に造形遊びをする活動」では、子どもが材料と場所とを組み合わせ、形を変化させたり材料を動かしたりするなどの行為を繰り返し行いながら新たな表し方を考える。そして思いに合わせて、形や色を工夫し、よりよい表し方を見いだすことで、この能力は高まる。

そこで私は、**材料と場所の特徴を組み合わせ、よりよい表し方を見いだして表す子ども**を目指す。これは「材料を△△という場所に組み合わせると〇〇ができた。工夫した点は、〇〇がもっと□□になるようにしたことだ。この工夫は、☆☆さんがやっていたことを基にして、自分なりに考えてできた」などと考えて表す子どもの姿である。

しかし多くの実践では、材料と場所を与えて活動させても、自ら豊かな発想をしたり、表し方を工夫して活動したりできる子どもは少数であった。依然として「材料同士ならつくっていけるものの、場所の特徴と材料の特徴とを組み合わせた表し方を思い付けず、造形活動が停滞してしまう」「材料と場所の様な組み合わせで満足し、表し方の工夫ができない」という課題がみられた。

この原因は二つある。一つ目は「この材料と場所で作ったり遊んだりしてみよう」などと投げ掛けて材料と場所を子どもに与えても、場所から発想ができるようにその特徴を体感させていないことである。二つ目は、新たな発想や表し方の工夫をするきっかけを、教師が個別支援で済ませたり特定の成果物を参考にさせたりしていることである。

そこで二つの改善を行う。一つ目は、形や色などに加え子どもが体感する特徴（動く・映る・光るなど）のある場所を設定し、場所の特徴を体感させてから、材料との組み合わせ方を考えさせることである。二つめは、子ども同士の表し方を共有させ、よりよい表し方を見いださせることである。

このようにして目指す姿は、今後子どもが様々な造形活動に取り組む際、よりよい表し方を見いだす過程で、自ら発想や構想を繰り返して造形的な能力を培うことにつながると考える。

(1) 「中核的な学習内容」

材料と場所の特徴を組み合わせたよりよい表し方

(2) 「学びをつなぐ力」

- ① 関係付けるすべを用いて、既存の知識や経験を基に、材料と場所との特徴を組み合わせた表し方（情報）を収集し、表したいもののイメージと、その形や色を考える力
- ② 比較するすべや関係付けるすべを用いて、自他の表し方を基に、表したいものの形や色を工夫して表す力

2 主張する働き掛け

まず、発想させる場所とかかわらせたい材料を触らせ、どんなことができるか問う。子どもは「〇〇という材料は、ねじったり丸めたりすることができる」などと、材料を使ってできる行為に気付く（C0）。気付いた行為は、子どもの言葉でまとめておく（材料の「マッチングカード」）。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

特徴を体感できる場所と、特徴を生かすことのできる課題とを提示する。

問いをもたせるための働き掛けである。まず、動く・映る・光るといった特徴のある場所を提示する。このような特徴により、子どもが場所から発想することのきっかけをつくる。そして課題を提示する。課題は、「この場所を、〇〇のようにしよう」などと子どもの意識を方向付けるものである。そして、「触ったり感じたりして、どんな場所か確かめてみよう」などと提案し、子どもに場所の特徴を体感させる。子どもは、場所にあるものに触れ、特徴をとらえ、「この場所で〇〇ができそうだ」などと、その場所でできる行為に気付く。気付いた行為は、子どもの言葉でまとめておく（場所の「マッチングカード」）。

このような、場所でできる行為に気付いた子どもに材料を与え活動させ続ける。すると、しばらく

活動した後「まだ他にもできそうだけれど、どんな表し方があるかな」などと考える子どもが出てくる。このような状態を問いをもったと判断し、次のように働き掛ける。

働き掛け2

材料と場所の特徴を組み合わせる活動を提示（アイデアスライドショー）し、気付いたことを発表させる。

新しい発想や表し方の工夫に気付かせるための働き掛けである。子どもを大型テレビの前に集合させる。ここで、**材料と場所を組み合わせる活動する写真や動画（「対象」）**を、スライドショーで提示する。ここでは全体にスライドショーで示し、子どもにどのような活動をしていたのか気付いたことを発表させる。すると子どもは、比較するすべを用いてスライドショーを見たり友達の発表を聞いたことから、自分が気付いていなかった友達の表し方や、材料の新しい表し方、その場所での様々な表し方に気付く。

働き掛け3

材料と場所の「マッチングカード」を提示し、自分のイメージに合う表し方を問う。

よりよい表し方を見いださせるための働き掛けである。スライドショーから様々な表し方に気付いた子どもに、材料と場所の「マッチングカード」を提示する。そして、「自分のイメージに合う表し方はどれか」と問う。このとき子どもは、様々な表し方の中から、自分がやってみたい表し方を選択し、よりよい表し方として見通しをもつ。そこで、再度活動に取り組ませる。すると子どもは比較するすべや関係付けるすべを用いて、これまでの自分の遊び方やつくり方に、友達の遊び方やつくり方を取り入れて、よりよい表し方を見だし、さらにつくったり遊んだりする。

「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛け

活動を通してできたことを成果物や記録物を基に振り返らせる。

学びをつなぐ力の有用性の自覚を促す働き掛けである。振り返りワークシートを配付し、「①材料を使ってどんなことをしたか」「②工夫したところはあるか」「③工夫の基になっているものは何か」という視点から振り返りを記述させる。子どもは「材料を△△という場所に組み合わせると〇〇ができた。工夫した点は、〇〇がもっと□□になるようにしたことだ。この工夫は、☆☆さんがやっていたことを基にして、自分なりに考えてできた」などと振り返り、学びをつなぐ力を自覚する。このようにして、**材料と場所の特徴を組み合わせ、よりよい表し方を見いだして表す子ども(Cn)**となる。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、「中核的な知識や技能」を獲得することができたか。
- ② 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、「学びをつなぐ力」の有用性を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3において、材料と場所との特徴を組み合わせ、よりよい表し方を見いだして表しているかどうかを、活動の様子や発言から検証する。
- ② 働き掛け3において、スライドショーに出ていた表し方を基に、よりよい表し方をしているかどうかを活動の様子や発言から検証する。
- ③ 「学びをつなぐ力」の有用性の自覚を促す働き掛けにおいて、比較するすべや関係付けるすべを用いて、表したいもののイメージをもち、これまでの自分の表し方に、スライドショーに出ていた表し方を取り入れて活動したことを自覚しているかどうかを、振り返りのワークシートから検証する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業（6月） 「A Hole New World ～毛糸を使ってゆらゆらビヨンビヨン～」（3時間）
- (2) 中間検討会（9月） 「透明トンネルが大変身 ～形や色を、写して、透かして～」（3時間）
- (3) 初等教育研究会（2月） 「光のカラフルアート広場 ～セロファンと光を組み合わせる～」（5時間）